

すべては「本物の美しさ」を撮るために

伝説の活動屋、木村大作監督をして「奇跡の映画」と言わしめ、出演俳優が「これほど強烈に何かを与えてくれたものはない」(浅野忠信)、「世界遺産のような映画」(香川照之)、「撮影時以外もすべてが映画のよう」(松田龍平)と驚嘆の声を上げた「劔岳 点の記」。見る者を圧倒するシーンの連続は、監督、出演者、スタッフらのリアリティーへの徹底したこだわりと情熱によってもたらされた。

ロケは平成十九年四月、立山連峰の実景撮影でスタート。九月十月には浅野や香川、仲村トオルら主要キャストを迎え、本格的な山岳ロケを行った。仲村は「せえせえ言いながら登っていると劔岳は険しさをさらさらした」と振り返る。

翌二十年四月、七月の富山ロケは、松田龍平を加えた測量隊役の七人全員がそろい、明治時代に劔岳に登頂した測量隊の動きを体験するように、俳優陣も実際に歩き、登り続けた。ようやく現場にたどり着いた後、撮影が始まる毎日。モロ師岡は「とにかく過酷でした」と苦難のロケを述べた。

【本物へのこだわり】

七月十七日には全編のクライマックス、劔岳登頂シーンに臨んだ。足場のない、大きな岩の壁を重い荷物を担いでよじ登った。「登山靴やヘルメットを着用し、万全の装備で登ったが、初めて山が怖いと思った。立山信仰で恐れられた山だと実感した」と香川。浅野は「とんでもない状況での撮影を乗り越え、動じない人間になれた気がする」と感慨を口にした。

通常、映画撮影は俳優のスケジュールや天候の都合でシーンの順番に関係なく撮られ、あとでつなぎ合わせる場合が多い。しかし、木村監督は脚本の流れの通りに撮影する「順撮り」を貫いた。最初の撮影で、富山駅に降り立った柴崎芳太郎のこやかな表情が、立山連峰に入り、劔岳に迫った後では一変する。揺が生え、目つきが鋭さが増し、ドキュメント映像のような迫力になった。CGなど画像処理では絶対でないリアリティーがフィルムに収まった。本物に「たわわ」劔岳点の記「ならでは撮影方法だ」。



雪渓での撮影。悪天候の中でもロケ隊はフィルムを回し続けた



劔岳山頂の危険な岩場でカメラを構える木村監督



撮影現場で、柴崎芳太郎を演ずる浅野忠信と木村監督

【厳しさの中に美しさ】

「厳しさの中にしか美しさはない」。主人公、柴崎芳太郎のせりふは木村監督の信念でもある。「美しい風景とは、じつと耐え抜いた者に対してだけ、神が恵んでくれるものだ。その美しさを撮るために二年を費やしたんだ」という木村監督の執念が、人知を超えた映画を生み出した。

この映画は、柴崎ら測量隊と同様、山と純粋に向き合い、仕事に誇りを持って真しに取り組んだ人々の魂の記録である。

原作 **新田次郎**

新田次郎 点の記 劔岳

につた・じろう 1912年長野県生まれ。小説家、気象学者。妻は作家・藤原い。32年中央気象台(現気象庁)に入る。56年に山岳小説「強力伝」で直木賞受賞。63-65年には気象庁の富士山気象レーダー建設責任者として成功を収める。66年に退職し、執筆活動に専念する。代表作に「八甲田山死の彷徨」「富士山頂」「武田信玄」など。題材として大きな仕事をやり遂げた歴史上の人物や、自然と人間とのかかわりを、写実的かつ力強い描写で表現した作品が多い。80年、67歳で死去。

監督 撮影 **木村大作**

木村大作 1939年東京都生まれ。58年東宝撮影部のカメラ助手として映画界に入る。73年「野獣狩り」で撮影監督デビュー。以降数々の作品で撮影監督をつとめる日本を代表する映画カメラマン。日本アカデミー賞最優秀撮影賞など受賞多数。代表作は77年「八甲田山」(森谷司郎監督)、80年「復活の日」(深作欣二監督)、81年「駅 STATION」(降旗康男監督)、86年「火宅の人」(深作欣二監督)、99年「鉄道員(ぽっぽや)」(降旗康男監督)、2001年「ホテル」(同)など。「劔岳 点の記」で、初めての監督を務める。

新版

劔岳〈点の記〉

新田次郎(原作) 山本甲士(文)

我が国最高の撮影監督といわれる木村大作が自らメガホンをとった畢生の映画化作品の原作にして、新田次郎山岳小説の白眉を、映画公開に先がけて読みやすくした(新版)

誰かが行かねば、道はできない。

日本人の心がここにあり、富山県を舞台にした不朽の名作。

つるぎだけ

6月、映画公開!

出演 浅野忠信 香川照之 松田龍平 宮崎あおい 仲村トオル 役所広司

●定価2000円(税別) 978-4-16-328060-9

●定価7200円(税別) 978-4-16-711234-9